

# 一栄谷の 私見異見



新型コロナウイルス

は依然として猛威をふるっており、医療関係者の身を挺しての奮闘と、政府や自治体による緊急対策によって、からうじてパンデミックに陥ることは回避されている。しかしながら予断を許さない状況がまだしばらくは続くことになりそうだ。安倍政権や政府による対策には批判も多いが、最悪の事態は回避されており、緊急対策という意味では、その努力は評価したい。しかしながら意欲の大半を占めているのは経済問題であって、経済問題が深刻であり、経済が破綻しかねないぎりぎりのところまで追い込まれつつあることはそのとおりであるが、経済が回復すればいいという問題なのではまったくない。

新型コロナウイルスは未曾有の経験であり、基本原因について特定されるには至っていないものの、こうした事態が今後も発生する可能性は高いように思われた。さまざまな論議が交錯するが、筆者の思いと同様の見方を提示しているのが、4月13日の毎日新聞多刊で紹介しているイタリア作家、オロ・シヨルターと

ある。外出制限下でつづいたエッセー集「コロナの時代の僕ら」を緊急出版しているという。彼の発言を引用しながら「ウイルスは〈環境破壊が生んだ多くの難民の一部だ(中略)新しい微生物が人間を探すのではなく、僕らのほら」が彼らを巣から引っ張り出している。ウイルスを引っ張り出したのは、野生動物と人間の接触であ

## 新型コロナウイルスへの謙虚さ 「生命」への謙虚さ

り、その一因に「ますます頻繁になっている豪雨と干ばつの激しく交互する異常気象」があり、その原因は温暖化による気候変動だと自説を展開する」とある。人間による開発行為が森の多きを切り払ってしまい、森の中で生息していたコウモリ等が生息することができなくなって人間世に飛来するようになり、人間と接触することによってウイルスの侵入を招いた。この人間による森林破壊、自然環境を象徴するもの

こそ気候変動であり、その結果としての異常気象だと語っているものと理解する。

このように新型コロナウイルス発生の本原因が、人間による過度な経済行動による自然崩壊にあるとするならば、根本に戻って自然との共生関係を回復させていくしか解決の途はなく、自然と調和できる経済への再構築を前提とするしかない。パンデムの箱はずでに開けられてしまっているのであり、新型コロナウイルスが終息をみても、根本原因そのものを除去しない限りは、悲劇が繰り返されるだけでなく、悲惨の度を加速させることは必至だ。

これまで資本の論理に巻き込まれてはならない社会的共通資本の重要性についての訴えが繰り返され、SDGsや温室効果ガス排出規制の取組等の動きはありながらも、政府も経済界も、そして国民自身も、あくまで他人事としてアクション的にしか受け止めてこなかったのではないだろうか。今問われているのは「生命」の問題である。生命について科学が解明できているのはごく一部でしかない。科学が生命との因果関係を明らかにしていくことはほぼ不可能であり、人間の謙虚さが必須とされることだ。時代は新型コロナウイルス問題を生命の問題として受け止めて、国をあげて腹をくつての毅然とした対応を求めている。

(農的社会学サイエンス研究所代表)